弘前市立博物館歴史講座 2019　　2019 年 11 月 24 日（日）

観音信仰と三十三霊場巡りの歴史

弘前大学人文社会科学部　　武井　紀子

１．はじめに

・本講座の目的
・津軽における観音三十三霊場巡り【図１・表１】

２．観音信仰の歴史

（１）観音菩薩とは

＊ 菩薩：悟りを完成させる以前の段階の釈迦。転じて、悟りを求め、仏の慈悲行為を実践して一切衆生の救済に努める者のこと。

・ 観音菩薩の利益 ： 『法華経』観世音菩薩普門品 ＝ 幅広い現世利益
　観音の名を唱えれば、七難（火難・水難・風難・刀杖難・羅刹難・伽鎖難・怨賊難）を逃れ、心に観音を念ずれば、三毒（貪・嗔（しん）・痴）を離れ、観音を礼拝すれば二求両願を満足させる。
・ 観音の三十三身（救うべき相手に応じて姿を変えて説法をする）
・ 観音の姿　聖観音
　　変化観音〔十一面・不空羂索・千手・如意輪・馬頭・准胝など〕
・ 阿弥陀如来の脇侍としての観音 ： 現世利益だけではなく来世の救済も行う。

（２）日本における観音信仰

○ 中国の観音信仰
・『法華経』の漢訳を経て広まる。父母の追善供養と現世利益が結びついて展開する。

○ 奈良時代までの観音信仰
・日本への仏教伝来：6 世紀中頃の欽明朝に、百済の聖明王が伝える。
・現存する最古の観音像：法隆寺献納金剛立像〔辛亥年＝ 651 年〕
・7 世紀までの仏教：尊像の区別なく、現世利益や追善供養を願う
　　↓
・8 世紀　尊像それぞれの利益の特色が理解されはじめる。
　・鎮護国家と観音信仰（密教的観音信仰）
　史料１『続日本紀』天平 12 年（740）9 月己亥条
　　四畿内・七道諸国に勅して曰はく「比来、筑紫の境に不軌の臣有るに縁りて、軍に命じて討伐せしむ。願はくは、聖祐に依りて百姓を安みせんことを。故に今国別に観世音菩薩像一**軀**、高さ七尺なるを造り、并せて観世音経一十巻を写せ」とのたまふ。
　… 観世音の「不可思議、威神之力」による藤原広嗣の乱の討伐成功祈願。
　　玄昉（遣唐使として入唐し多くの経典をもたらす）の発案によるものか。

・民衆と観音信仰：『日本霊異記』にみる説話

史料２『日本霊異記』上巻　兵災に遭ひて、観音菩薩の像を信敬し、現報を得る縁　第十七

伊予国越知郡の大領の先祖越智直、百済を救はむとするに当りて、遣されて軍に到りし時、唐兵に擒はれ、其の唐国に至る。我が八人、同じく一つの洲に澄む。儻として観音菩薩の像を得て、信敬尊重す。八人心を同じく師、竊に松の木を截りて一つの舟を為り、其の像を請け奉りて、舟の上に安置し、各誓願を立て、彼の観音を念ず。爰に西風に随ひて、直に筑紫に来る。朝廷聞こし召して、事の状を問ふ。天皇忽ちに矜びて、楽ふ所を申さしむ。是に越智直言はく「郡を立てて仕へむと欲ふ」といふ。天皇許可したまふ。然して後に郡を建て寺を造り、即ち其の像を置けり。時より今の世に迄り、子孫相続きて帰敬す。蓋し、是れ観音の力、信心の至りなり。〔以下略〕

＊『日本霊異記』：日本国現報善悪霊異記。薬師寺僧景戒の撰。平安時代初期成立。
奈良～平安時代の仏教霊異譚により善悪の因果応報を説いた仏教説話集。

…『観音経』に説かれる幅広い現世利益に所出し、様々な願いが叶えられる。

３. 霊場の形成と巡礼

（１）平安時代の観音信仰と霊場の形成

○ 密教と浄土教における観音信仰

― 平安貴族の信仰：現世利益（除病・延命・得富）と来世の救済（六道輪廻からの解脱）。
10 世紀頃に貴族社会に定着　ex）治安 3 年（1023）藤原道長の法成寺六観音造立

○ 霊験寺院（霊場）への参詣　… 特定寺院の本尊に対する信仰

・摂関期、貴族による参詣（とくに貴族女性による参籠が多くなる）

史料３『かげろふ日記』（右大将道綱母）

（前略）明くればいい、暮ればなげきて、さらばいとあかつきほどになりとも、げに言ひてのみやと思ひ立ちて、石山に十日ばかりと思ひ立つ。（中略）夜になりて、湯など物して、御堂にのぼる。身のあるやうを仏に申すにも、涙にむせぶとていひもやられず。（以下略）

⇩

・院政期、観音霊場参詣が活発化

半僧半俗の西国三十三所巡礼者、修験者山伏、熊野比丘尼、勧進僧、一般の僧侶など

← 寺院側による参詣勧進の動き

・参詣者に向かって語られるべき縁起などが整えられる

ex）『三宝絵詞』（984 年成立）、『清水寺縁起』（10 世紀後半～ 11 世紀前半成立）

・布教の場における唱導と『今昔物語集』説話（後掲史料４）

○ 観音霊場の形成

・従来からの護国寺霊験寺院（長谷寺・壺阪寺・石山寺・清水寺・粉河寺など）

史料５『梁塵秘抄』（後白河法皇による今様集）

観音験を見する寺、清水、石山、長谷の御山、粉河、近江なる彦根山、間近く見ゆるは六角堂

・聖の住所：聖の修験的霊場を巡り、その奇瑞を求め参詣する → “巡礼”

史料６『梁塵秘抄』

聖の住所はどこどこぞ、箕面よ勝尾よ播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日の御碕、南は熊野の那智とかや、

聖の住所はどこどこぞ　大峰・葛城・石の槌、箕面よ勝尾よ播磨の書写の山、南は熊野の那智新宮、

大峰聖を船に乗せ、粉河の聖を舳に立てて、正しき聖に梶とらせてや、乗せて渡さん常住仏性や極楽へ、

＊ 熊野那智：修験霊場であり観音霊場。補陀洛山に擬せられる。

（２）西国三十三所巡礼の成立【図２・表２】

○ 院政期（12 世紀頃）における霊場の組織化

・10 世紀〔寛和 2(986)年〕、花山法皇に始まるとするが（『竹居清事』『天陰語録』）、不審。

・貴族たちによる京都近郊の洛中観音巡り（七観音詣）　　～室町時代まで続く

史料７『愚昧記』仁安 3 年(1168)5 月 21 日条　三条実房の日記

昏黒の後、騎馬〈侍三人共に在り〉、同右大弁、先日の約諾に依るなり。即ち相伴して七観音に詣づ。近代貴賤群を為し参詣す。甚だ霊験有ると云々。予度々参詣するなり。其の寺々、六角堂〈如意輪〉、行願〈千手〉、清水寺〈千手〉、六波羅蜜寺〈十一面〉、中山寺〈千手〉、河崎寺〈聖観音〉、長楽寺〈准〉。或いは長楽寺に参らず。観音寺を参ること有る人は、或いは又参るに長寿院を得。右大弁彼の院に参る。予長楽に参るの間、自然八観音に参る。

・『寺門高僧記』（1220 ～ 1230 頃成立。三井寺僧侶の伝記集）

行尊（1055 ～ 1135）　「観音霊所三十三所巡礼記〈日数百廿日〉」

覚忠（1118 ～ 1177）　「巡礼記」応保元年(1161)正月に三十三所巡礼した記録。

⇒ 数ある巡礼ルートのうちの一つ。寺門を中心とする行者の厳しい修験の場。

○ 西国三十三所巡礼のルートの固定化（15 世紀中葉）と特殊習俗

史料８『天陰語録』（五山僧・天陰竜沢〔1422 ～ 1500〕著）

巡礼の人、村に溢れ、里に盈つ。背後に尺布を貼り、書きて曰く、三十三所巡礼某国某里、関吏譏りて之を征かず、舟師憐れみて之に賃せず。（中略）寛和二年より今明応八年まで已に五百余霜、巡礼の人益熾なり。

→ 笈摺の制服化。（巡礼体としての呪術力）

・納札　… 西国三十三所には東国出身の巡礼者が多い（霊場への奉納札による）

・巡礼歌の成立 …　16 世紀成立『閑吟集』に類似

ex）あなたふと　導きたまへ観音寺　遠き国より運ぶ歩みを（32 番近江観音寺）

（３）三十三観音霊場巡礼の展開

○ 坂東三十三所

・西国三十三所の影響／熊野信仰との関係

・鎌倉幕府の成立と源家将軍の篤い観音信仰

史料９『吾妻鏡』治承 4 年(1180)

此の間、武衛御髻の中より正観音像を取り、或巌窟に安み奉らる。実平其の御素意を問い奉る。仰せて云はく、首を景親らに伝ふるの日、此の本尊を見る。源氏大将軍の所為に非ざるの由、人定めて誹り貽すべしと云々。件の尊像は、武衛三歳の昔、乳母清水寺へ参籠せしめ、嬰児の将来を祈り、懇ろに篤く二七箇日を歴るに、霊夢の告を蒙る。然して二寸銀正観音像を得て、帰敬奉るところなりと云々。

・頼朝と三井寺との密接な関係

⇒ 鎌倉初期にその基礎が存在し、頼朝一門の観音信仰により成立。
但し、民衆への普及時期は 15 世紀中頃。

○ 秩父三十三所

・西国、坂東におくれて成立。

・三霊場の一体化が意識的に進められる。→ 西国坂東秩父百所巡礼

○ 地方霊場の展開 … 西国や坂東・秩父三十三所への巡礼が不可能な人々を地理的至便さにおいて吸収。室町中期に東国を中心に成立。多くは江戸時代の成立。

ex）奥州糠部三十三所（永正 9 年〔1512〕成立）

・『南部叢書』五所収「封内郷村志」巻 4 に二戸郡鳥越村観音堂・外山村朝日観音堂の項目に、永正九年の巡礼札が引用される。

・観光上人が観音巡拝の際に長谷寺に奉納した巡礼札〔三戸郡南部町恵光院蔵〕
主文「奥州糠部郡三十三所順礼本願観光上人永正九暦壬申六月吉日」
左右に朱で御詠歌が書かれる。

○ 近世における三十三観音巡礼：現生利益・福寿除災に加え、巡礼が行楽化する傾向。

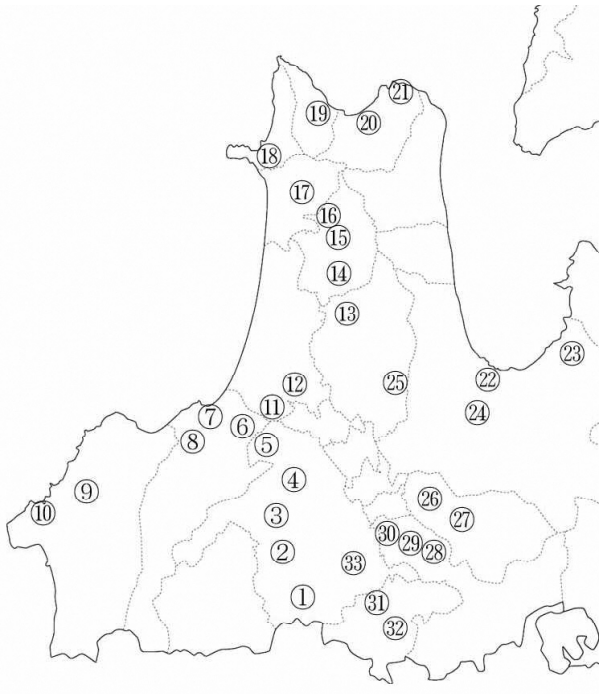
4．おわりに

・日本における観音信仰の広まり

・三十三所巡礼と地域の歴史・伝統文化を考える

【参考文献】

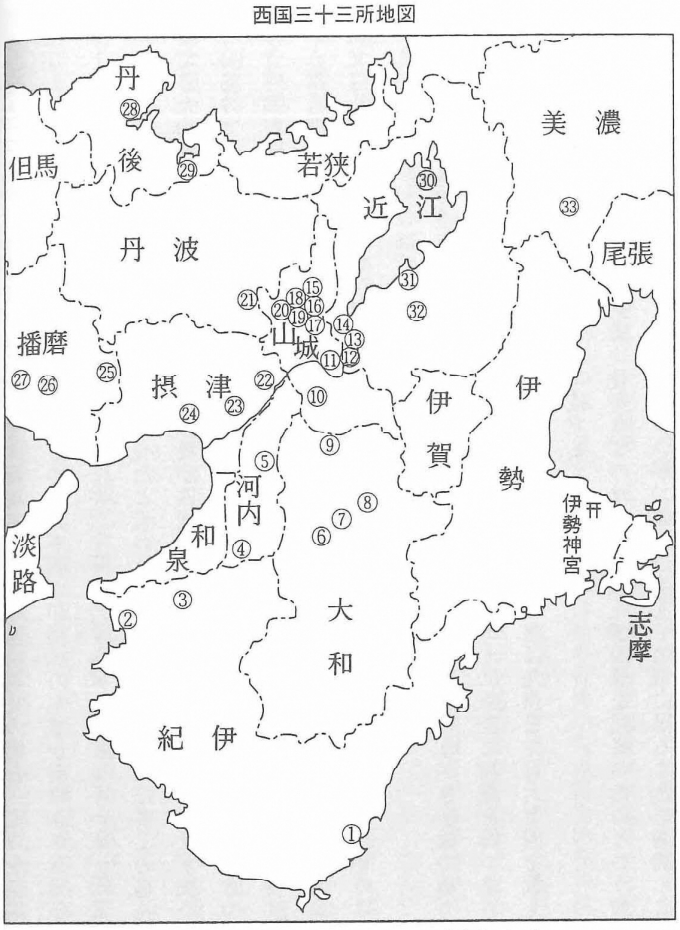
井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（井上光貞著作集第七巻、岩波書店、1985、初版 1956）
新城常三「中世の西国巡礼」（真野俊和編『講座日本の巡礼 1 本尊巡礼』雄山閣、1996、初出 1982）
速水侑『観音・地蔵・不動』（吉川弘文館、2018）
速水侑『観音信仰』（塙書房、1970）
速水侑編『観音信仰』（民衆宗教史叢書 7 、雄山閣、1982）
吉井敏幸「西国巡礼の成立と巡礼寺院の組織化」（真野俊和編『講座日本の巡礼 1 本尊巡礼』雄山閣、1996、初出 1985）



【図１・表１】津軽三十三所一覧

1	護国山久渡寺	18	無縁山海満寺
2	清水観音（多賀神社）	19	龍馬山義経寺
3	求聞寺	20	高野山観音堂
4	紫雲山南亭院	21	袈月海雲洞釈迦堂
5	十腰内観音堂（巌鬼山神社）	番外	鬼泊巌屋観音堂
6	湯舟観音堂（高倉神社）	22	無量山正覚寺
7	北浮田弘誓閣（高倉神社）	23	安養山夢宅寺
8	日照田神社（高倉神社）	24	入内観音堂（小金山神社）
9	見入山観音堂	25	松倉観音堂
10	春光山円覚寺	26	宝巌山法眼寺
11	下相野観音堂（高城八幡宮）	27	袋観音堂（白山姫神社）
12	蓮川観音堂	28	広船観音堂（広船神社）
13	川倉芦野堂（三柱神社）	29	沖館観音堂（神明宮）
14	弘誓寺観音堂	30	大光寺慈照閣（保食神社）
15	薄市観音堂	31	居土普門堂（熊野神社）
16	今泉観音堂	32	苦木観音長谷堂
17	春日内観音堂	33	観音山普門院

【図２・表２】西国三十三所



地図中の番号は現在の西国三十三所の順番。　【速水2018】

西国三十三所一覧

	行尊巡礼記	覚忠巡礼記	現在
①	長谷寺	那智山	那智山青岸渡寺
②	竜蓋寺	金剛宝寺	紀三井寺（金剛宝寺）
③	南法華寺	粉河寺	粉河寺
④	粉河寺	南法華寺	槇尾寺（施福寺）
⑤	金剛宝寺	竜蓋寺	藤井寺（剛林寺・葛井寺）
⑥	如意輪堂（那智山）	長谷寺	壺坂寺（南法華寺）
⑦	槇尾寺	興福寺南円堂	岡寺（竜蓋寺）
⑧	剛林寺	施福寺	豊山初瀬寺（長谷寺）
⑨	総持寺	剛林寺	興福寺南円堂
⑩	勝尾寺	総持寺	三室戸寺（御室戸）
⑪	仲山寺	勝尾寺	上醍醐寺
⑫	清水寺（播磨）	仲山寺	岩間山正法寺
⑬	法華寺（播磨）	播磨清水寺	石山寺
⑭	如意輪堂（書写山）	播磨法華寺	三井寺（園城寺）
⑮	成相寺	書写山	今熊野観音寺（東山観音寺）
⑯	松尾寺	成相寺	清水寺
⑰	竹生島	松尾寺	六波羅蜜寺

	行尊巡礼記	覚忠巡礼記	現在
⑱	谷汲寺	竹生島	六角堂頂法寺
⑲	観音正寺	谷汲	革堂行願寺
⑳	長命寺	観音正寺	西山善峰寺
㉑	如意輪（園城寺）	長命寺	菩提山穴穂寺（穴太・穴憂）
㉒	石山寺	三井寺如意輪堂	総持寺
㉓	正法寺（岩間寺）	石山寺	勝尾寺
㉔	准胝堂（醍醐）	岩間寺	中山寺（仲山寺）
㉕	観音寺（新熊野奥）	上醍醐	新清水寺（播磨清水寺）
㉖	六波羅蜜寺	東山観音寺	法華山一乗寺（播磨法華寺）
㉗	清水寺	六波羅蜜寺	書写山円教寺
㉘	六角堂	清水寺	成相寺
㉙	行願寺	六角堂	松尾寺
㉚	善峰寺	行願寺	竹生島宝厳寺
㉛	菩提寺	善峰寺	長命寺
㉜	南円堂（興福寺）	菩提寺（穴太）	観音正寺
㉝	千手堂（御室吉山）	御室戸山	谷汲華厳寺

表中の（　）内は，寺院の別名，所在，「巡礼記」の寺名。

史料4 『今昔物語集』巻十六

殖槻寺観音、助貧女給語 第八

今昔、大和ノ国、敷下ノ郡ニ殖槻寺ト云フ寺ラ有リ。等身ノ銅ノ正観音ノ験ジ給フ所也。

其ノ辺ニ其ノ郡ノ郡司有ケリ。一人ノ娘有ケルヲ、父母此レヲ愛テ悲テ思ヒ傅ケレバ、常ニ此ノ殖槻寺ニ将参テ、「此ノ女子ニ愛敬・富ヲ令得メ給ヘ」ト祈リ申ケル程ニ、娘ノ年二十ニ余ニケレバ、仮借スル人数有ケレドモ、父母、「心ニ不叶ザラム聟ハ不取ジ」ト思テ、人ヲ撰テ不合セザリケル程ニ、其ノ母身ニ何トモ無キ病ヲ受テ、日来煩テ死ニケリ。父ハ母ヨリモ年老タリケレバ、「何ニカ成ナムズラム」ト思ケル程ニ、亦、日来不煩シテ二三日許悩テ死ニケリ。

其ノ後チ、此ノ女子一人家ニ有テ、月日ノ行ニ随テ、住ム宅モ荒レ以行ク。仕ケル従者共モ皆行キ散リ、領シケル田畠モ人ニ皆押取ナドシテ、知ル所モ無カリケレバ、不合ニ成ル事、日ヲ経テ増ル。然レバ、此ノ娘メ心細キマヽニ、哭キニノミ泣テ日ヲ暮ラシ夜ヲ嗟ケル程ニ、四五年ニモ成ヌ。

而ル間、此ノ女子此ノ観音ノ御手ニ糸ヲ懸テ、此ヲ引テ花ヲ散シ香ヲ焼テ、心ヲ至シテ申サク、「我独身ニシテ父母無シ。家空クシテ財物無シ。身命ヲ存セムニ便無シ。願クハ大悲観音、慈悲ヲ垂タレ給マヒテ、我ニ福ヲ授ケ給ヘ。譬ヒ我レ前世ノ悪業ニ依テ貧キ身ヲ受タリト云フトモ、観音ノ誓ヲ思フニ、何ドカ不助給ザラム」ト、日夜ニ泣ク〻礼拝恭敬シテ願ヒ請ケリ。

（中略）

其ノ後、夫妻トシテ此ノ家ニ住テ、大ニ富メル事祖ノ時ノ如シ。夫妻共ニ愁ヘ無クシテ、命ヲ持チ身ヲ全クシテ久ク有ケリ。「此偏ニ観音ノ助ニ依テ也」ト思テ、恭敬供養シ奉ル事不怠ザリケリ。

此ヲ思フニ、観音ノ御誓不可思議也。現ニ人ト成テ、衣ヲ被ギ給ヒケム事ノ哀レニ悲キ也。殖槻寺ト云フ、此レ也。亦、其ノ観音、于今其ノ寺ニ在マス。人必ズ参テ可礼奉観音也トナム語リ伝ヘタルトヤ。

『日本霊異記』中巻

孤の嬢女、観音の銅像に憑り敬ひ、奇しき表を示して、現報を得る縁 第三十四

諾楽の右京の殖槻寺の邊の里に、一の孤の嬢有り。未だ嫁がず夫无し。姓名未だ詳ならず。父母有りし時に、多く饒にして財に富み、數屋倉を作り、観世音菩薩の銅像一體を鑄奉る。高さ二尺五寸なり。家を隔てて佛殿を成し、彼の像を安みして供養す。聖武天皇の御世に、父母命終はり、奴婢逃げ散り、馬牛死に亡す。財を失ひ家貧しく、獨空しき宅を守り、晝夜に哀び啼きて涙を流す。観音菩薩は、願ふ所を能く與ふと聞きて、其の銅像の手に繩を繫けて牽き、花香燈を供へ、福分を願ひて曰はく「我乃ち一子にして、父母无く、孤にして唯獨居り。財亡く家貧しく、身を存ふるに便无し。願はくは我に福を施せ、早く貺へ、急に施せ」といひて晝夜に哭き願ふ。里に富める者有り。妻死にて

（中略）

「癡なる嬢子なるかな。若し鬼に託へルや。我は知ら不」といふ。彼の使猶言はく「我も亦知ら不」といふ。嘖められて家に歸り、常の如く禮せ將として、堂に入りて見れば、使に著せたりし黒き衣、銅像に被れり。爾に廼ち知る、観音の示す所なることを。因りて因果を信け、増加慇に勤めて、彼の像を恭敬す。此れより以來、本の大きなる富を得、飢を脱れ愁無く、夫妻天无く、命を全くし身を存へき。斯れ奇異しき事なり。